

青年期における自己像と時間的展望の関連について

博士前期課程 平成27年度修了生 宮地涼子

要約

本研究では、現代の青年がどのような時間的展望を持っており、個人の時間的展望に何が影響を与えているかについて知るために、現代青年期における自己像と時間的展望の関連について、杉山(1995)と比較することと新たに性差について検討することを目的とした。その結果、各自己像間のズレが個人の時間的態度に影響を及ぼすことが明らかになった。性差についても男性と女性では自己像間のズレと時間的態度との間に異なる様相を呈していることが明らかとなり、女性においては現在に失望しやすく将来にも悲観しやすい反面、将来の自己評価を肯定的に予想できると考えられた。また、他の要因との関わりも予測され、さらなる検討の必要性が考えられた。

キーワード：青年期、自己像、時間的展望、時間的態度

問題と目的

1. 時間的展望とは

時間的展望 (Time perspective) とは、一般的には「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」と定義されている (Lewin, 1951)。時間的展望の研究には大きく分けて2つの方向があると考えられているが、それには主に将来への展望の広がりや密度などの内容に関する認知的な側面についての研究と、過去・現在・未来がどのように関連しているかという情緒的側面についての研究が挙げられており、後者は特に自我同一性の問題と関連していると考えられている (都筑, 1982)。また、白井 (1997) によれば、時間的展望は①狭義の展望、②時間的態度、③時間的指向性、④狭義の時間知覚に分けて考えられている。このように、時間的展望に関する用語は数多く、それぞれがニュアンスの違いを含んでおり、定義を明確にすることは難しいという (園田, 2007)。本研究においては、時間的展望の

一側面である時間的態度を時間的展望を測定する指標として使用し、時間的態度については“過去・現在・未来に対する感情的評価、あるいは将来または過去の事象に関する肯定的・否定的評価の総体”という白井 (1997) の定義を用いた。

2. 自己像と時間的展望との関連

杉山 (1996) によれば、自己概念は必ずしも現在の自己に関する情報だけに基づくのではなく、過去の自己や未来の自己についても、その全体としての自己概念の在り方に関わっていると述べた。また彼は過去や未来の自己という自己認知の側面は、自己概念の一部として動機づけや感情とも深い関連を持ち、その一方で、現在の自己に関する認知自体にも影響を与えていることを指摘した。Rogers (1951) によれば、自己概念とは“自己の経験が象徴化した形で表された全体像”と定義し、理想自己と現実自己とのズレの大きさを不適応の指標として重視し

た (Rogers, 1959)。自己像間のズレの大きさが不適応に関連していることを実証した研究は数多くみられるが、Higginsら (1985, 1986, 1987) の自己不一致の種類と不快感情の種類結びつきについての一連の研究では、現在自己と理想自己とのズレによって、悲しみ、失望、不満、恥、困惑などネガティブな感情が生じることを明らかにしている (榎本, 2000)。

3. 青年期における時間的展望と自己像と自我同一性との関連

青年期とは目標を再構成し、自己の主体性を発達させる時期である (Nurmi, 2004)。Erikson (1959) によれば、この時期に期待されるのは、同一性の危機や葛藤を乗り越え、自己の統合したイメージを持つことで、自我同一性を確立することであると述べた。白井 (2008) によれば、自我同一性の拡散症状の中の1つに時間的展望の拡散があり、これは時間を経ていく感覚が極めて不安定な状態を指していることから、時間的展望が青年期の発達を論じる際のポイントとなっている。

武知 (2008) によれば、青年期の女性は公的・理想的には男女平等でも、私的・現実的には結婚・出産・家事・育児が期待されることが多いなど、女性の生き方に対する価値は混乱し、拡散していると述べ、女性の実際の生き方も多様化しているとした。このように選べるといえば選べる状態になり、自分の母親の生き方をそのままモデルにすることも困難な中、青年期から成人期に移行しようとする女子にとっての生きにくさが指摘されている (柏木・伊藤, 2001, 岡本・松下, 2002)。生きにくさをもたらす要因の1つに、男性には一貫している学業や職業生活での成功への期待が、女性では変化する、あるいは複数に分化するという二重規範がある。そこでは、勉強も仕事も頑張って、結婚もし、育児も大切にしようといった具合に、現在の日本の労働環境や夫婦の家事分担の実情からすると達成が大変難しい、過重な期待をかけられることがあるという (大野, 2001)。また女性の

場合、結婚や出産など予測が立てにくいライフイベントの影響も大きく、自分以外の要因により影響を受けるため、男性よりも将来を展望することが難しく、変更を余儀なくされることもありうるだろうと述べている (武知, 2008)。

以上のことも踏まえ、近年ではこの時間的展望に関する様々な研究が行われているが、その中でも時間的展望と自己との関連を扱う内容が増えてきている。そうした研究の1つには、セルフ・ディファレンシャル尺度 (長島・藤原・原野・斎藤・堀, 1967) を自己像の指標とし、自己像と時間的態度との関連を検討した杉山 (1995) がある。彼は、時間的展望の規定要因としての自己概念を、現在の自己と未来の自己の相互関連の中で捉えることを目的とし、個人が認識する自己像のズレと時間的態度との関連について検討した。18歳から23歳の大学生240名 (男性114名、女性126名) を対象とし、時間的態度については小宮山 (1989) の個人の過去・現在・未来への態度を測る尺度を用いて行った。杉山 (1995) は、自己像を3つに分類しており、過去の自分はどんな人間であったかという自己認知を反映したものを“過去の自己像”、現在の自分をどんな人間だと思っているかを反映したものを“現在の自己”とした。また“未来の自己像”については、そうになりたいという願望である“理想自己”と、実際にはこうなっているであろうという“予想自己”の2つに分けた。その結果、現在自己と理想自己の間のズレが大きいほど、個人の現在への態度はネガティブになることを明らかにした。また、予想自己と理想自己とのズレが大きいほど個人の未来への態度はネガティブになるが、現在自己と予想自己とのズレが大きいほど、個人の未来への態度はポジティブになることを示した。このことから、予想自己と理想自己のズレと個人の未来への態度の関連については、未来においてそのズレを埋められるだろうと期待することで、個人の未来への態度はポジティブになると述べた。また、現在自己と予想自己のズレと個人の未来への態度との関連からも、個人の未来への態度にポジ

ティブな影響を及ぼしているのは、未来の自己に対する“期待”なのではないかと論じている(杉山, 1995)。

さらに、自我同一性混乱尺度(砂田, 1979)により自我同一性レベル高群・低群に分けて、自我同一性の違いによる自己像間のズレと時間的態度との関連についても検討しているが、自我同一性レベル高群・低群どちらにおいても、予想自己と理想自己の間のズレと個人の未来への態度との関連を見出せなかった。一方、自我同一性レベル低群では、現在自己と理想自己の間のズレが大きいほど個人の現在への態度はネガティブになったのに対し、自我同一性レベル高群では関連がみられないことが明らかとなった。これらの違いから、現在自己と理想自己のズレと自我同一性レベルとの間には関連があることを示唆している(杉山, 1995)。

4. 本研究の目的

本研究では、20年前の杉山(1995)研究と比較することで、現代の青年がどのような時間的展望を持っており、個人の時間的展望に何が影響を与えているのか検討することを目的とする。杉山(1995)の研究から20年ほど経過したが、当時の青年はバブル期を経験しており、好景気を育ってきた青年と、今日のバブル期以降の環境で育ってきた青年との間には、将来に対する期待や見通しの持ちづらさなど、20年前とは異なる様相を呈することが予測される。そのため、本研究では、異なる時代背景を持つ青年について比較検討する。また、見通しの持ちにくい現代青年においても、特に男性は社会の中で職業中心に生きていくことに価値を置く傾向が強く、そのため、先行きの見えない現代社会の影響をより強く受けることが推測される。一方の女性では、家庭や職業など複数の役割を比較選択しながら生きていく価値を持つ傾向が強いことで、多重役割による葛藤が生じやすくなると同時に、多様な未来を思い浮かべやすいのではないかと考えられる。このように先の見通しの持ちにくい時代だからこそ、時間的展望のあり方にも男

性と女性で違いがみられるのではないかと考える。そのため、本研究では杉山(1995)は検討していなかった性差についても検討したい。

以上のことから、以下の仮説を立て検証する。
 仮説1：現在自己と理想自己のズレが大きいほど、個人の現在への態度はネガティブになる。
 仮説2：予想自己と理想自己のズレが大きいほど、個人の未来への態度はネガティブになる。
 仮説3：自我同一性レベルの高群の人では、現在自己と理想自己のズレと個人の現在への態度の相関はみられないが、自我同一性レベル低群の人では、現在自己と理想自己のズレが大きいほど、個人の現在への態度はネガティブになる。

方法

調査対象者 関西近郊の大学生または大学院生(18~26歳)を対象とした。有効回答者236名(男性118名, 女性118名, 平均年齢20.2歳, 標準偏差1.29)となった。

調査期間 2015年9月~10月

手続き 質問紙法で実施した。質問紙は講義内に配布し、その場で回答を求める方法と、知人や友人に依頼して個別に手渡し、または郵送にて配布し、後日回収する方法の2通りで行った。所要時間は15~20分程度であった。

調査内容

- ①フェイスシート 年齢, 性別, 学科, 回生について尋ねた。
- ②時間的態度の測定 SD法の形式を使用し、小宮山(1989)の時間次元に関する評価因子から代表的な3項目(明るい-暗い, 美しい-醜い, 良い-悪い)を選択し、7段階で回答を求め、“あなたの過去”“あなたの現在”“あなたの未来”についてそれぞれ評定してもらった。提示の際には光背効果を考慮して、形容詞の順序と方向はランダムにして測定した。
- ③自己像の測定 長島ら(1967)の大学生を対象としたセルフ・ディファレンシャル尺度に

よって測定する。「鈍感な-敏感な」など複数の修飾対からなる修飾語47対の中から、「向性」、「情緒安定性」、「強靱性」、「誠実性」、「過敏性」、「理性」の6因子それぞれから、因子負荷量の高い項目を3つ挙げ、計18対を使用した。提示の際には光背効果を考慮して、形容詞の順序と方向はランダムにして7件法で測定した。本研究では、杉山(1995)にならない、現在の自分をどんな人間だと思っているかを反映したものを“現在自己”とし、未来の自己像については、そうなりたいという願望である“理想自己”、実際にはこうなっているであろうという“予想自己”に分類した。手順としては、“現在自己”“理想自己”についての年齢の評定を行い、次にそれらの想定年齢について判断させた。このように現在と理想の自己像の存在時期を明確にした上で、「ここまでは“理想のあなた”について答えてもらいました。それでも、その“理想のあなた”の時期に、あなたは実際にはどういう人間になっていると思いますか。その“予想のあなた”についてお答えください」という教示を与え、予想の自己像についての評定を行い、“予想自己”の想定年齢についても判断させた。

- ④自我同一性の測定 砂田(1979)の自我同一性混乱尺度を用いて行った。34項目よりなる1次元の尺度を使用した。反応は3件法とし、同一性混乱を示している「はい」の反応を2点、「どちらでもない」を1点、「いいえ」を0点とした。

結果

はじめに“理想自己”と“予想自己”を未来の自己と定義したので、それを「各自己像の存在時期」の対比によって確認した。その結果、理想自己、予想自己の年齢が現在自己の年齢以下となるケースはなかった為、対象者236名のまま分析を進めた。各自己像の想定年齢の平均は、現在自己で20.3歳(標準偏差1.42)、理想自己では26.3歳(標準偏差4.68)、予想自己では

27.0歳(標準偏差5.96)であった。そのうち、男性における各自己像の想定年齢の平均は、現在自己で19.9歳(標準偏差1.32)、理想自己で26.9歳(標準偏差5.54)、予想自己で28.2歳(標準偏差7.24)であった。女性における各自己像の想定年齢の平均は、現在自己は20.6歳(標準偏差1.44)、理想自己は25.7歳(標準偏差3.61)、予想自己は25.7歳(標準偏差3.99)であった。

1. 時間的態度の測定

時間的態度の測定に関して、主成分分析を行った結果(表1)、1因子性が強いと考えられたので、各3項目の単純合計を過去・現在・未来への態度得点とした。得点が高いほど、ポジティブな態度を示す。なおCronbachの α 係数は、個人の過去への態度が $\alpha = .77$ 、個人の現在への態度が $\alpha = .83$ 、個人の未来への態度が $\alpha = .91$ と高い内的整合性が認められた。時間的態度得点は3点から21点までの値をとり得るが、個人の過去への態度の平均は12.7点(標準偏差3.23)、個人の現在への態度の平均は14点(標準偏差3.25)、個人の未来への態度の平均は14点(標準偏差3.59)であった。

表1. 個人の過去・現在・未来への態度の主成分分析

| | 個人の過去への態度 | 個人の現在への態度 | 個人の未来への態度 |
|--------|-------------|-------------|-------------|
| 項目内容 | 因子負荷量 | 因子負荷量 | 因子負荷量 |
| 悪い-良い | .857 (4.49) | .912 (4.86) | .935 (4.56) |
| 暗い-明るい | .857 (4.26) | .870 (4.34) | .934 (4.68) |
| 醜い-美しい | .764 (3.93) | .806 (4.79) | .903 (4.75) |
| | 固有値2.05 | 固有値2.24 | 固有値2.56 |

()内は平均値

2. 現在自己・理想自己・予想自己の各自己像の構造比較

現在自己・理想自己・予想自己のそれぞれに関して「セルフ・ディファレンシャル尺度」の18項目についての因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。その結果、解釈可能性から各自己像において5因子を抽出した。

2-1. 現在自己の構造

第1因子は「たくましい-弱々しい」などの5項目で、強靱で意欲的な側面を代表する項目の負荷が高かった。第2因子は「静かな-にぎやかな」などの3項目で、社会性の中の向性に対応した項目の負荷が高かった。第3因子は「感情的な-理知的な」などの3項目、理性や落ち着きに関する項目の負荷が高かった。第4因子は「感情的な-理性的な」などの3項目で、精神的に健康なイメージなど、ポジティブな情動の存在が窺われる項目の負荷が高かった。第5因子は「不真面目な-まじめな」などの4項目で、道徳性に関するものや社会的成熟に関するものからなる項目の負荷が高かった。これらの結果は長島ら（1967）の因子分析と概ね類似していたことから、長島らと同様に第1因子を「強靱性」、第2因子を「向性」、第3因子を「理知性」、第4因子を「情緒安定性」、第5因子を「誠実性」と命名した。さらに、下位検査ごとにクロンバックの α 係数を求めた。「強靱性」は $\alpha = .76$ 、「向性」は $\alpha = .82$ 、「理知性」は $\alpha = .78$ 、「情緒安定性」は $\alpha = .67$ 、「誠実性」は $\alpha = .61$ と、どれも高いことから一定程度の信頼性が確認された。

2-2. 理想自己の因子構造

第1因子は「元気な-病弱な」などの7項目で、強靱で意欲的な側面を代表する項目の負荷が高かった。第2因子は「静かな-にぎやかな」などの3項目で、社会性の中の向性に対応した項目の負荷が高かった。第3因子は「冷たい-暖かい」などの2項目で、精神的に健康なイメージなど、ポジティブな情動の存在が窺われる項目の負荷が高かった。第4因子は「感情的な-理性的な」などの3項目で、理性や落ち着きに関する項目の負荷が高かった。第5因子は「不誠実な-誠実な」などの3項目で、道徳性に関するものや社会的成熟に関するものからなる項目の負荷が高かった。これらの結果は長島ら（1967）の因子分析と概ね類似していたことから、長島らと同様に第1因子を「強靱性」、第2因子を「向性」、第3因子を「情緒安定性」、

第4因子を「理知性」、第5因子を「誠実性」と命名した。さらに、下位検査ごとにクロンバックの α 係数を求めた。「強靱性」は $\alpha = .89$ 、「向性」は $\alpha = .73$ 、「情緒安定性」は $\alpha = .79$ 、「理知性」は $\alpha = .65$ 、「誠実性」は $\alpha = .67$ と、どれも高いことから一定程度の信頼性が確認された。

2-3. 予想自己の因子構造

第1因子は「たくましい-弱々しい」などの6項目で、強靱で意欲的な側面を代表する項目の負荷が高かった。第2因子は「不誠実な-誠実な」などの3項目で、道徳性に関するものや社会的成熟に関する項目の負荷が高かった。第3因子は「無口な-おしゃべりな」などの3項目で、社会性の中の向性に対応した項目の負荷が高かった。第4因子は「感情的な-理性的な」などの3項目で、理性や落ち着きに関する項目の負荷が高かった。第5因子は「自分勝手な-思いやりのある」などの3項目で、精神的に健康なイメージなど、ポジティブな情動の存在が窺われる項目の負荷が高かった。これらの結果は長島ら（1967）の因子分析と概ね類似していたことから、長島らと同様に第1因子を「強靱性」、第2因子を「誠実性」、第3因子を「向性」、第4因子を「理知性」、第5因子を「情緒安定性」と命名した。さらに、下位検査ごとにクロンバックの α 係数を求めた。「強靱性」は $\alpha = .85$ 、「誠実性」は $\alpha = .68$ 、「向性」は $\alpha = .78$ 、「理知性」は $\alpha = .68$ 、「情緒安定性」は $\alpha = .73$ と、どれも高いことから一定程度の信頼性が確認された。

3. 自己像のズレの算出

自己像のズレについては、砂田（1979）や松田・広瀬（1982）にならい、セルフ・ディファレンシャル尺度を利用し、現在自己・理想自己・予想自己の各自己像のズレを測定した。先述の因子分析の結果から、本研究の各自己像は、杉山（1995）と同様の因子構造となった。しかし、現在自己、理想自己、予想自己の各因子における項目内容に違いがみられた。そこで、杉山（1995）では、因子ごとの得点差の2乗を合計していたが、本研究では各項目の得点差の2乗

を合計し、平方根 ($Dis = \sqrt{\sum d^2}$: 以下, Disスコア) を各自己像のズレとした。まず、現在自己と理想自己のDisスコア, 現在自己と予想自己のDisスコア, 予想自己と理想自己のDisスコア, 以上の3つのDisスコアを算出した。

4. 自我同一性レベル高群・低群の分類

自我同一性混乱尺度については、各項目得点と当該の項目得点を除く合計得点との相関を算出した結果、2つの項目(一生の仕事についてたびたび志を変えた、待たされるととてもイライラする)に関しては相関が有意ではなかったので、その項目を除外した。それ以外の32項目は1%水準で有意な相関を持っていたため、32項目の合計得点を同一性混乱の指標として採用した。得点が高いほど自我同一性が混乱していることを表す。全体の α 係数は $\alpha = .85$ となり、内的整合性が認められた。得点分布は正規分布に近かったので、上位・下位約30%ずつで被検者を分割し、低得点の30%の被検者群を自我同一性レベル高群 ($n = 69$), 高得点30%の被検者群を自我同一性レベル低群 ($n = 73$) とした。

5. 各自己像と個人の時間的態度との関連

全体のデータにおいて三つのDisスコアは、.17から.75までの相関が認められたので、他の二つのDisスコアを統制して各Disスコアと時間的態度の間の偏相関係数を算出した(表2)。結果から、個人の過去への態度、個人の現在への態度、個人の未来への態度それぞれにおいて、現在自己と理想自己のDisスコアとの間に有意な負の関連がみられた(個人の過去への態度 $r = -.13, p < .05$, 個人の現在への態度 $r = -.19, p < .01$, 個人の未来への態度 $r = -.21, p < .01$)。したがって、現在自己と理想自己の間のズレが大きいほど、個人の過去への態度、個人の現在への態度、個人の未来への態度はそれぞれネガティブになることが明らかとなった。また、予想自己と理想自己のDisスコアと個人の過去への態度、個人の現在への態度、個人の未来への態度との間に有意な関連はみられな

かった。したがって、予想自己と理想自己のズレと個人の未来への態度には関連がみられなかった。

6. 自我同一性レベル高群・低群による各自己像と個人の時間的態度との関連

個人の自我同一性レベル高群・低群に分類した上で、他の二つのDisスコアを統制して、各Disスコアと時間の時間的態度の間の偏相関係数を算出した(表3)。結果から、現在自己と理想自己のDisスコア, 現在自己と予想自己のDisスコア, 予想自己と理想自己のDisスコアと個人の過去への態度、個人の現在への態度、個人の未来への態度については、すべてにおいて自我同一性レベル高群・低群どちらも有意な相関はみられなかった。続けて、自我同一性レベル高群・低群によって自己像のズレ(Disスコア)を比較した。 t 検定の結果、現在自己と理想自己のDisスコア ($t(140) = -6.14, p < .01$), 現在自己と予想自己のDisスコア ($t(140) = -2.34, p < .05$), 理想自己と予想自己のDisスコア ($t(140) = -4.04, p < .01$), それぞれにおいて自我同一性レベル高群・低群の差が有意であった。つまり、自我同一性レベル低群の人ほうが自我同一性レベル高群の人よりも、現在自己と理想自己のズレ、現在自己と予想自己のズレ、理想自己と予想自己のズレが大きいことが示された。さらに、現在自己、理想自己、予想自己のそれぞれについて自我同一性レベル高群・低群の違いを検討するために、各自己像の平均得点について比較した。 t 検定の結果、現在自己の平均得点 ($t(140) = 9.43, p < .01$) と予想自己の平均得

表2. 各自己像間のズレ(Disスコア)と時間的態度との偏相関

| | 過去への 態度 | 現在への 態度 | 未来への 態度 |
|------------------|------------|------------|------------|
| 全体 ($n = 236$) | | | |
| [現在自己-理想自己] | -.13* | -.19** | -.21** |
| [現在自己-予想自己] | -.01 | .09 | .11 |
| [予想自己-理想自己] | -.00 | .07 | .03 |

* $p < .05$ ** $p < .01$

点 ($t(140)=6.01, p<.01$) で有意差がみられた。一方、理想自己の平均得点では有意差は見られなかった。つまり、自我同一性レベル高群の人のほうが自我同一性レベル低群の人よりも、現在自己の平均得点や予想自己の平均得点が高いことが示された。

7. 自己像のズレと時間的態度の比較における性差

男女について他の二つのDisスコアを統制し、各Disスコアと時間的態度との偏相関係数を求めると、著しい性差が認められた(表4)。男性においては、現在自己と理想自己のDisスコアと個人の過去への態度と有意な負の関連がみられた ($r=-.19, p<.05$)。つまり、男性においては現在自己と理想自己のズレが大きいほど過去への態度はネガティブになることが示された。しかし、現在自己と理想自己のDisスコアにおいて、個人の現在への態度や、個人の未来への態度との間には有意な相関はみられなかった。また、現在自己と予想自己のDisスコアと個人の過去への態度、個人の現在への態度、個人の未来への態度において有意な関連はみられなかった。さらに、理想自己と予想自己のDisスコアと個人の過去への態度、個人の現在への態度、個人の未来への態度それぞれの間においても有意な関連はみられなかった。

女性においては、現在自己と理想自己のDisスコアが個人の現在への態度と個人の未来への態度との間に有意な相関を示しており、現在と理想のズレが大きいほど、個人の現在への態度や個人の未来への態度はネガティブになるという負の関係にあった(個人の現在への態度 $r=-.35, p<.001$, 個人の未来への態度 $r=-.35, p<.001$)。しかし、現在自己と理想自己のDisスコアと個人の過去への態度との間には関連がみられなかった。また、女性では現在自己と予想自己のDisスコアが個人の現在への態度と個人の未来への態度との間に有意な正の関連を示した(個人の現在への態度 $r=.27, p<.01$, 個人の未来への態度 $r=.29, p<.01$)。つまり、現

在自己と予想自己のズレが大きいほど個人の現在への態度や個人の未来への態度はポジティブになることが示されたが、個人の過去への態度とは関連がみられなかった。さらに、女性では予想自己と理想自己のDisスコアにおいて、個人の現在への態度との間に有意な正の関連がみられた ($r=.22, p<.05$)。つまり、女性では予想自己と理想自己のズレが大きいほど、個人の現在への態度はポジティブになることが示されたが、個人の過去への態度と個人の未来への態度との間には関連はみられなかった。続けて、表4に示したように男性と女性で偏相関に差がみられたので、各Disスコアを比較した。検定の結果、現在自己と理想自己のDisスコアにお

表3. 自我同一性レベル高群・低群における各自己像のズレ (Disスコア) と時間的態度との偏相関

| | 過去への 態度 | 現在への 態度 | 未来への 態度 |
|-------------------|------------|------------|------------|
| 自我同一性レベル高群 (n=69) | | | |
| [現在自己-理想自己] | -.06 | -.08 | -.06 |
| [現在自己-予想自己] | -.14 | .12 | .04 |
| [予想自己-理想自己] | -.14 | .12 | .12 |
| 自我同一性レベル低群 (n=73) | | | |
| [現在自己-理想自己] | -.09 | -.16 | -.19 |
| [現在自己-予想自己] | .05 | .14 | .21 |
| [予想自己-理想自己] | -.05 | .07 | .06 |

* $p<.05$ ** $p<.01$

表4. 性別の各自己像のズレ (Disスコア) と時間的態度との偏相関

| | 過去への 態度 | 現在への 態度 | 未来への 態度 |
|-------------|------------|------------|------------|
| 男性 (n=118) | | | |
| [現在自己-理想自己] | -.19* | -.06 | -.16 |
| [現在自己-予想自己] | .05 | .27 | .29 |
| [予想自己-理想自己] | -.06 | .22 | .17 |
| 女性 (n=118) | | | |
| [現在自己-理想自己] | -.10 | -.35** | -.35** |
| [現在自己-予想自己] | .05 | .27** | .29** |
| [予想自己-理想自己] | -.05 | .22* | .17 |

* $p<.05$ ** $p<.01$

いてのみ性差が有意であった（両側検定： $t(234)=2.423, p<.05$ ）。つまり、女性のほうが男性よりも現在自己と理想自己のズレが大きいことが示された。また、現在自己、理想自己、予想自己、それぞれについての性差を検討するために、各自己像の得点について t 検定を行った（表5）。結果から、理想自己の合計得点においてのみ性差は有意であった（ $t(234)=4.35, p<.01$ ）。つまり、女性のほうが男性よりも理想自己の得点が高いことが示された。さらに、各自己像における性差を検討するために、各因子における性差についての t 検定を行った。結果から、現在自己の「理知性」、理想自己の「強靭性」、理想自己の「情緒安定性」、理想自己の「誠実性」、予想自己の「誠実性」において性差が有意であった。つまり、女性のほうが男性よりも理想自己の「強靭性」、理想自己の「情緒安定性」、理想自己の「誠実性」、予想自己の「誠実性」が高く、同時に、男性のほうが女性よりも現在自己の「理知性」が高いことが示された。

表5. 性別による各自己像と各因子の平均得点の検定結果

| | 因子 | 性別 | | t (234) |
|-----------|---------|---------------|---------------|-----------|
| | | 男性 (n=118) | 女性 (n=118) | |
| 現在自己 | 「強靭性」 | 4.07 (0.8) | 3.93 (1.1) | -1.13 |
| | 「向性」 | 4.16 (1.3) | 4.32 (1.3) | 1.01 |
| | 「理知性」 | 4.16 (1.1) | 3.73 (3.7) | -2.84** |
| | 「情緒安定性」 | 4.52 (0.9) | 4.59 (4.6) | 0.58 |
| | 「誠実性」 | 4.43 (0.8) | 4.51 (4.5) | 0.75 |
| 現在自己の平均得点 | | 4.25 (0.5) | 4.20 (0.7) | - .634 |
| 理想自己 | 「強靭性」 | 5.59 (1.0) | 6.07 (0.6) | 4.38** |
| | 「向性」 | 5.11 (1.0) | 5.25 (0.9) | 1.09 |
| | 「理知性」 | 4.47 (1.3) | 4.72 (1.0) | 1.66 |
| | 「情緒安定性」 | 5.47 (1.1) | 5.98 (0.9) | 3.88** |
| | 「誠実性」 | 5.36 (1.0) | 5.67 (0.7) | 2.81** |
| 理想自己の平均得点 | | 5.27 (0.7) | 5.63 (0.5) | 4.35** |
| 予想自己 | 「強靭性」 | 4.54 (1.0) | 4.64 (1.0) | 1.46 |
| | 「向性」 | 4.53 (1.1) | 4.74 (1.0) | 1.59 |
| | 「理知性」 | 4.34 (1.1) | 4.15 (1.0) | -1.44 |
| | 「情緒安定性」 | 4.85 (0.9) | 5.06 (0.9) | 1.75 |
| | 「誠実性」 | 4.80 (1.0) | 5.12 (0.8) | 2.78** |
| 予想自己の平均得点 | | 4.60 (0.7) | 4.73 (0.7) | 1.41. |

* $p<.05$ ** $p<.01$ ()内は標準偏差

考察

1. 各自己像と時間的態度との関連について

まず仮説1について検討する。仮説1の「現在自己と理想自己のズレが大きいほど、個人の現在への態度はネガティブになる」は支持された。これは杉山（1995）の結果とも一致する。また同時に、現在自己と理想自己のズレが大きいほど、個人の過去への態度や個人の未来への態度がネガティブになることも示された。これらのことは、現在自己と理想自己の間にズレが大きいほど、過去については「後悔」、現在については無力感や葛藤、未来に対しては展望を描きづらいために、個人の過去・現在・未来への態度がそれぞれネガティブになるのだと考えられる。

次に仮説2について検討する。仮説2：「予想自己と理想自己のズレが大きければ、個人の未来への態度がネガティブになる」については支持されなかった。杉山（1995）は、予想自己と理想自己のズレの大きさが個人の未来への態度にネガティブな影響を及ぼしており、これは予想自己と理想自己のズレは未来においてそれだけ目標に近づくことができるかという期待を反映しているからだとして述べている。しかし、本研究では予想自己と理想自己のズレと個人の未来への態度との関連はみられなかった。つまり、杉山（1995）の考察とは異なる結果を得た。これらのことは、社会情勢や雇用状況の不安定な現代社会において、未来を予測することは困難であるから、現代青年では遠い先の未来に期待することが難しくなっていることが考えられる。

続いて、仮説3について検討する。仮説3「自我同一性レベルの高群の人では、現在自己と理想自己のズレと個人の現在への態度の相関はみられないが、自我同一性レベル低群の人では、現在自己と理想自己のズレが大きいほど、個人の現在への態度はネガティブになる」については支持されなかった。杉山（1995）の研究では、自我同一性レベル低群では、現在自己と理想自己のズレが大きいほど個人の現在への態度はネガティブになったが、自我同一性レベル高群で

は、現在自己と理想自己のズレと個人の現在への態度に関連はみられなかった。しかし、本研究では、自我同一性レベル高群・低群どちらにおいても、各自己像のズレと、個人の過去への態度、個人の現在への態度、個人の未来への態度との間に関連はみられなかった。このことは、自我同一性レベル高群の人のほうが自我同一性レベル低群の人よりも、現在自己や予想自己の得点が高く、理想自己の得点には両群で差はないことから、自我同一性が混乱していない人は混乱している人に比べて、現在自己に対して満足度が高く、現在自己の先にある予想自己に対してもある程度の期待や希望を持っているのではないかと考えられる。一方、自我同一性レベル低群の人は、自我同一性レベル高群の人よりも、現在自己と理想自己のズレが大きいことも示された。このことは自我同一性が混乱している人は、混乱していない人よりも現在自己に対する満足度が低く、理想との落差が大きいことを示していると思われる。それにもかかわらず、現在自己と理想自己のズレの大きさが個人の現在へのネガティブな態度につながらないのは、現在に満足しているからではなく、理想を描くことすら難しいためであり、無力感の強さの表れと考えられる。そのため、現代社会での見通しの立ちにくさは、自我同一性が混乱している人の中でも、より自我同一性の混乱が大きい人に、未来への期待を持ちにくくさせる方向に影響すると考えられる。よって、現在自己と理想自己のズレの大きさと個人の現在への態度との間にも関連はみられなくなり、杉山（1995）とは異なる結果になったと考えられる。

2. 自己像間のズレと時間的態度における性差についての考察

本研究においては、現在自己・理想自己・予想自己の各自己像のズレと時間的態度の性差について検討を行った。

女性では、現在自己と理想自己の間にズレが大きいほど、個人の現在への態度や個人の未来への態度がネガティブになること、女性のほう

が男性よりも理想自己の得点が高いことや、女性のほうが男性よりも現在自己と理想自己のズレが大きくなることが明らかとなった（表4、表5）。これらのことから、現代の女性は仕事・結婚・出産などの多様なライフコースを持っており、理想を思い描く余地は男性より大きい。現在自己と理想自己の間にズレが生じやすく、理想が実現できない場合、現在自己への失望や未来に対しても悲観しやすくなることが考えられる。しかし、女性において、現在自己と予想自己のズレが大きいほど、個人の現在への態度と個人の未来への態度はポジティブになることも明らかとなった。このことは、女性の将来における自分の肯定的評価を予想できるため、未来への希望に繋がると考えられる。また、女性のほうが、結婚・出産なども含めライフコースに幅があるため、男性よりも将来への期待や希望が多くなる可能性を示すと考えられる。

一方、男性では現在自己と理想自己の間のズレが大きいほど、個人の過去への態度はネガティブになることが明らかとなった。これは、現在の状態と理想とする状態の間のズレが大きくなると、「あの時こうしていればよかった」と“後悔”することで、過去への態度がネガティブになりやすいのではないかとと思われる。また、男性では理想自己が女性より低く、将来の自分に対する理想像を思い描きにくいことが示された。これは、不安定で将来への見通しの立ちにくい現代社会の影響を受けやすいことに加え、一般的に男性では、職業中心のライフコースを取りやすく、理想像を描きにくいことが影響していると考えられる。

総合考察

本研究では、現代の青年がどのような時間的展望を持っており、個人の時間的展望に何が影響を与えているのかということ、杉山（1995）の先行研究と比較しながら明らかにし、現代の青年期における自己像と時間的展望について検討することを目的として調査を行った。現在自己と理想自己のズレが大きいほど、個人の現在

への態度はネガティブになることがわかり、20年前と同様に現代青年においても現在自己と理想自己とのズレに対して無力感や葛藤などを抱いていると考えられた。また、自我同一性レベルの高群・低群においても、自己像間のズレと個人の現在への態度との関連はみられなかった。このことは、自我同一性の混乱が大きい人にとっては、現代社会の不安定さや見通しの立ちにくさによって、未来への展望をより持ちにくくしていると考えられた。何よりも、本研究で特徴的なことは、杉山(1995)は指摘しなかった性差についてである。20年前と比べて、不安定さや見通しの立ちにくい現代社会では、青年は現在の自己と未来の自己の関連の中で、時間的展望を捉えることが難しくなっていると考えられるが、女性では男性とは異なることがわかった。これらのことは、女性のほうが男性よりも自己の成長に期待することが多く、現時点における自身の未来への変化への期待や希望を抱きやすいのではないかと考えられる。ライフコースに幅のあることを肯定的に捉え、多様な役割・価値観を持ちながら、臨機応変に対応を考えていくことが、時間的展望を広げることに役立つと思われる。また、青年期において時間的展望を意識する過程で、自らが人生の主体であると実感することがネガティブな感情をやりわらげ、あるがままに生きることを可能にすると考えられる。今後の課題としては、各自己像間のズレに影響を及ぼしている要因についてのより詳しく検討していく際に、各自己像間のズレを因子ごとに比較するの必要があり、各自己像の因子を構成する3項目を揃えての検討が必要であると考えられる。

引用文献

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and Life Cycle*. New York: *International Universities Press* (小此木啓吾訳編(1973). 自我同一性-アイデンティティとライフサイクル- 誠信書房)
- Higgins, E. T., Klein, R. & Strauman, T. (1985). *Self-concept discrepancy theory: A psychological model for distinguishing among different aspects of depression and anxiety*. *Social Cognition*, **3**, 51-76.
- Higgins, E. T., Bond, R. N., Klein, R. & Strauman, T. (1986). Self-discrepancies and emotional vulnerability: How magnitude, accessibility, and type of discrepancy influence affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 5-15.
- 柏木 恵子・伊藤 美奈子(編)(2001). 女性のライフデザインの心理①——自分らしい生き方を考える 大日本図書
- 小宮山 要(1989). 青年の時間的展望に関する研究 1——未来の時間的展望の明暗と時間次元に対する態度の比較—— 桜美林短期大学紀要, **25**, 105-126.
- Lewin, K. (1951). *Field Theory and Social Science* New York: Harper (猪股 佐登留 訳(1974). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 松田 君彦・広瀬 春次(1982). 青年期における自己像と自我同一性 教育心理学研究, **30**(2), 157-161.
- 長島 貞夫・藤原 喜悦・原野 広太郎・斎藤 耕二・堀 洋道(1967). 自我と適応の関係についての研究(2)-Self-Differentialの作製 東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59-83.
- Nurmi, J. E. (2004). Socialization and self-development: channeling, selection, adjustment and research. In Lerner, R. M. & Steinberg, L (Eds.), *Handbook of adolescent psychology*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons. pp85-124.
- 岡本 祐子・松下 美知子(編)(2002). 新女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
- 大野 祥子(2001). 青年期の長期化と親への依存 柏木 恵子・伊藤 美奈子(編)女性のライフデザインの心理① 大日本図書 pp11-32.
- Rogers, C. R. (1951). *Client-Centered Therapy: Its current practice, implications and Theory*. Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1959). A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in

- the client-centered framework. In Koch, S. (ed.) *Psychology: A study of science. Vol. 3*: New York: McGraw Hill
- 白井 利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 白井 利明 (2008). 自己と時間—時間はなぜ流れるのか— 心理学評論, **51** (1), 64-75
- 園田 直子 (2007). 時間的展望研究の動向—都筑学・白井 利明 (編) 時間的展望研究ガイドブック— ナカニシヤ出版 pp97-99
- Strauman, T. J., & Higgins, E. T. (1987). Automatic activation of self-discrepancies and emotional syndromes: When cognitive structures influence affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1004-1014.
- 杉山 成 (1995). 時間次元における諸自己像の関連からみた時間的展望— 心理学研究, **66**, 283-288.
- 杉山 成 (1996). 時間的展望—松田 文子・調枝 孝治・甲村 和三・神宮 英夫・山崎 勝之・平 伸二 (編著) 心理的時間——その広くて深い謎— 北大路書房 pp404-415.
- 砂田 良一 (1979). 自己像との関係からみた自我同一性— 教育心理学研究, **27**, 215-220.
- 武知 優子 (2008). 思春期・青年期とジェンダー—青野 篤子・赤澤 淳子・松並 知子 (編) ジェンダーの心理ハンドブック— ナカニシヤ出版 pp28-36.
- 都筑 学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究— 教育心理学研究, **30**, 73